

## ■ミカムから辿る靴産業の「今」と2025年秋冬ファッショントレンド■

イタリア靴産業は減速、世界靴生産も停滞している…。

靴ジャーナリスト 大谷知子

### ●来場者は、ほぼ前回並みの4万人強

国内でも2025年秋冬物展が開催されているが、世界に向けて2025年秋冬靴ファッションを提案するミカムは、ミラノコレクションを軸としたミラノファッションウィークに先んじる2月23～25日、ミラノ郊外のロー見本市会場で開催された。

そのミカムを起点に、靴産業の現状と今秋冬靴ファッションのトレンドをレポートしてみたい。

ミカムはコロナ禍以降、バッグのミペルなどの展示会とのジョイント開催になっているが、今回もこれまでと同様にミペルの他、アパレルの「The One Milano」、アクセサリーの「Milano Fashion & Jewels」との合同展の形で開催された。また、最終日の25日からは同会場で革を中心とした靴・皮革製品素材展のリネアペレが開催された。

主催者の発表によると、出展は、ミカム単独で世界28カ国から853ブランド。内訳は、イタリア国内が415、イタリア以外が438。また、4展示会全体では、1758ブランド。そのうちイタリア以外が51カ国・46%を占めたとしている。

これからすると、ミカムの出展者が48.5%を占めたことになる。

来場者は、4展示会合計で4万449人。このうち45%がイタリア以外からで、来場国

は「日本、中国、フランス、スペイン、ドイツ、ギリシャ、トルコを含む127カ国」とした。

前年の開催と比較すると、前回の2024年9月が4万950人、前年同期の同2月が4万821人。いずれとの比較でも微減ではあるが、現状維持とも言える数字だ。

しかしコロナ禍前は、ミカム単体で4万人を大きく超える来場者を集めていたことを思うと、影響力の後退は否定できない。

そんな中でミカムの魅力をアピールするために力を入れているのが、「MICAM X」などの主催者の企画エリアだ。「MICAM X」内では、ファッショントレンドセミナーやファッションショー、またスタートアップの紹介などを行っている。そのなかで前回から登場したのが、靴学校とジョイントした教育関連の展示。これを今回は、ホール1に「MICAM ACADEMY」のネーミング



ミカムの会場



「MICAM ACADEMY」に設けられた  
ワークショップ

で具現化した。

このエリアは、若い人たちに靴の世界に浸ってもらうのが狙い。そのために伝統の職人技からデジタル技術による最新の物づくりまでが体験できるように構成された。デジタル技術では、スニーカーからラグジュアリーシューズまでユニークなデザインのアップーを編み出せるニットイングマシン、最新の素材を用いた積層によるソールの造形などが披露された。

また、靴型にフードを被せ、フードにデザインを描くというワークショップも設けられた。参加者は、自分のデザインを“@micam.milano”というハッシュタグをつけて投稿できるという試みも行われた。

さらに教育をテーマにパネルディスカッションも行われ、フィレンツェのフェラガモミュージアムのステファニア・リッチ館長が、偉大な職人でありデザイナーであったサルヴァトーレ・フェラガモについて語った。

このような試みは、ミカムを主催するイタリア靴メーカー協会が、産業の継続・発展には人の育成が重要であるという問題意識を持っていることの表れと言えよう。

## ●イタリア昨年靴生産は1億2410万足

次にイタリア靴産業の現状を見てみたい。

【表1】は、2024年1～10月のイタリア靴輸出をまとめたものだが、98億4271万ユーロ・1億5733万5000足。前年同期比は、それぞれ8.1%、44%の減少となった。また、コロナ禍発生以前の2019年比は、金額は13.6%増となったが、数量は10.0%減。数量は、コロナ禍前に戻っていない。

また、素材別で見ると、前年同期を上回ったのは、ラバーの金額5.3%増、数量12.7%増のみ。その他は、金額、数量ともに減少となり、なかでも革製は金額7.4%減、数量5.9%減と厳しい状況だ。

コロナ禍による落ち込みから2021年、2022年にV字回復。これは、コロナ禍にあっても好調に推移したラグジュアリーブランドがもたらしたものだだったが、2023年にはその勢いが落ち着き、後半には陰りが見え始めた。そして2024年は、金額、数量ともに減少となった。産業に関するリリースの解説では、「12月までの年間通期では金額ベースで8.4%減と推定」とし、その要因は「地政学的緊張、エネルギー価格の新たな上昇、経済の不確実性が高まる中で、これが高級品にも及び、パンデミック後の景気回復の原動力になっていた多国籍ファッション企業のOEM生産にも大きな影響を与えた」としている。「多国籍ファッション企業」とは、ラグジュアリーブランドを展開する、LVMHを筆頭としたファッションコングロマリットのことだ。

輸出相手国別では、トップはフランス。米国を挟んでドイツ、スイスと続く。スイスは、数年前まで輸出国トップだったが、ラグジュアリーブランドの流通ハブだったからであり、流通政策の変化によってトップの座を譲った。金額49.9%減、数量34.7%減という数字から見ると、ハブの役割の終焉はさらに強まっていると言える。

しかし、輸出先の地域別集計では、EU

【表1】イタリア2024年1～10月の靴輸出

輸出国	2024年1～10月			2023年同期比			2019年同期比		
	金額	数量	平均単価	金額	数量	平均単価	金額	数量	平均単価
	100万€	1000足	€	%	%	%	%	%	%
1) フランス	1948.51	31,003	62.85	-1.9	-1.1	-0.8	+43.2	+0.5	+42.5
2) 米国	1140.64	11,687	97.60	-5.6	-11.9	+7.1	+35.0	-5.3	+42.6
3) ドイツ	1014.47	24,715	41.05	-4.1	+1.8	-5.8	+17.5	-9.3	+29.5
4) スイス	617.39	6,088	101.41	-49.9	-34.7	-23.3	-58.5	-56.7	-4.0
5) 中国	544.07	3,095	175.80	+2.5	+18.9	-13.8	+110.9	+58.6	+33.0
6) スペイン	462.30	10,727	43.09	+8.4	+1.9	+6.4	+50.0	+7.8	+39.2
7) 英国	342.60	5,377	63.72	-7.4	-8.5	+1.2	-38.1	-51.7	+28.3
8) オランダ	328.69	4,668	70.42	-3.3	-4.6	+1.4	+64.6	+7.4	+53.2
9) ポーランド	305.05	9,075	33.62	+13.6	+19.5	-4.9	+138.5	+125.1	+6.0
10) 香港	267.08	1,205	221.70	+7.2	-6.6	+14.8	-4.6	-35.2	+47.3
11) UAE	250.86	1,496	167.71	+24.0	-5.5	+31.2	+171.9	+42.5	+90.7
12) 日本	197.67	1,406	140.64	+1.2	-3.0	+4.3	+14.7	-28.2	+59.7
13) 韓国	191.68	996	192.39	-27.7	-30.2	+3.7	-3.6	-36.6	+52.1
14) ロシア	184.50	2,865	64.39	-22.4	-15.0	-8.7	-29.4	-31.4	+2.8
15) ベルギー	179.65	3,453	52.02	-10.8	-25.5	+19.8	+1.9	-19.4	+26.5
…									
20) チェコ	82.68	2,870	28.81	-3.1	+0.3	-3.4	+21.4	+0.6	+20.7
…									
42) ウクライナ	26.08	303	86.09	+1.8	-14.2	+18.6	-31.1	-46.1	+27.7
…									
合計	9842.71	157,335	62.56	-8.1	-4.4	-3.8	+13.6	-10.0	+26.3

データ出所：Confindustria Moda Research Centre（イタリア統計局データより算出）

域内は、金額1.2%減、数量0.9%減と堅調だ。なかでも好調な経済が伝えられているポーランドは、靴にも好調さが出ており、金額13.6%増、数量19.5%増となっている。

金額、数量ともに増加を示したのは、中国。金額2.5%増、数量は18.9%と20%近い伸びを示し好調だ。しかし、リリースの解説は、月別に見ると「7月から10月にかけては金額が4%減少」と、今後への不安をおわせている。

その他、主要相手国では、米国が金額5.6%、数量11.9%の共に減。またロシアは、金額22.4%、数量15.0%の共に減となっている。

アジアでは、昨年同期は日本よりも良い数字を示していた韓国が、金額27.7%減、数量30.2%減と大幅な落ち込みとなっているのは、気になるところだ。

このような輸出の状況は当然、生産にも

影響を及ぼす。2024年の通年データが速報値で公表されたが、生産量は、1億2410万足。前年比16.1%の落ち込みとなった。最盛期には6億足近くあったものが、1億足台前半とは、感慨深いものがある。

工場数は、昨年の3564から3369に減少。195工場がなくなった。また、従事者数は、7万3639人から7万841人となり、3.8%の減少を示した。

靴メーカーの経営は厳しく、政府が実施する貸金支援策の利用が急増し、過去最高を記録したと言う。

●日本の靴輸入は回復しつつあるが…

では、日本向けはというと、日本は、輸出相手国中12位。1億9767万ユーロ・140万6000足。前年同期比は、それぞれ1.2%増、3.0%減。コロナ禍前の2019年同期比は、それぞれ14.7%増、28.2%減となった。

【表2】日本の2024年靴・履物輸入

		2024年		2024年伸び率			
		数量(千足)	金額(百万円)	対2023年		対2019年	
				数量	金額	数量	金額
靴・履物合計	6401	15,997	14,779	-6.0%	-8.6%	-20.5%	+4.7%
	6402	157,044	215,725	+0.5%	+2.8%	-12.7%	+31.8%
	6403	38,347	199,887	-2.4%	+2.9%	+5.8%	+48.2%
	6404	336,111	264,542	+0.3%	+7.5%	-8.7%	+12.7%
	6405	64,841	16,589	+3.7%	-2.0%	+34.2%	+33.4%
	合計	612,340	711,521	+0.3%	+4.2%	-6.2%	+27.1%
イタリア	6401	1	33	-61.3%	-58.1%	-72.1%	+253.4%
	6402	164	2,559	+0.5%	-10.5%	-41.1%	+17.0%
	6403	1,265	51,176	-7.1%	+9.2%	-23.4%	+68.8%
	6404	264	12,165	-17.7%	-5.1%	-33.7%	+28.4%
	6405	9	399	-33.4%	-18.4%	-31.7%	+113.8%
	合計	1,703	66,333	-8.5%	+5.1%	-27.6%	+56.4%
中国	6401	15,570	13,858	-4.7%	-6.9%	-18.9%	+5.7%
	6402	119,460	120,916	+0.6%	-0.4%	-14.5%	+21.2%
	6403	5,721	22,550	-2.6%	-1.4%	-18.2%	+10.7%
	6404	263,980	120,924	+0.4%	+2.1%	-9.4%	+0.4%
	6405	60,900	13,489	+6.4%	+1.9%	+40.1%	+44.0%
	合計	465,629	291,737	+1.0%	+0.3%	-7.0%	+10.9%

※データ出所：財務省「貿易統計」

【注】HSコード＝6401:防水性の履物 6402:甲と底がゴムもしくはプラスチック製 6403:甲が革製 6404:甲がテキスタイル製 6405:その他の履物

内容を見るために、日本の2024年通年輸入統計を集計してみた。それが、【表2】だ。

2024年靴・履物輸入は、数量6億1234万足・7115億2100万円となった。前年比は、それぞれ0.3%増、4.2%増。2019年対比は、6.2%減、27.1%増。数量はコロナ禍前に近づいた。金額は大きく回復と取れる数字だが、為替レートが異なる。2019年平均レートは、1ドル＝109.0円だったのに対して、2024年平均は、1ドル＝151.4円（いずれもインターネットサイト「世界経済のネタ帳」より）と4割近く円安になっている。従って20%台の増加では、為替に吸収されてしまい、実質は伸びているとは言えない。

輸入国は、主力のイタリアと中国を集計したが、イタリアは数量で最もシェアの高い「HSコード6403＝革靴」の2019年対比は、数量23.4%減に対して金額は68.8%と大幅な増加となっている。これは、ラグジュアリーブランドを中心とした高額品が中心となり、中クラスの製品が振るわないことが

要因になっていると想像される。

中国の2019年対比は、数量7.0%減、金額10.9%増で、まずまずの回復と言えそう。HSコード別で見ると、「6403＝革靴」の伸び率が芳しくない。平均単価を当たると、革靴は約3942円と格段に高く、価格の安い製品へのシフトが進んでいるようだ。

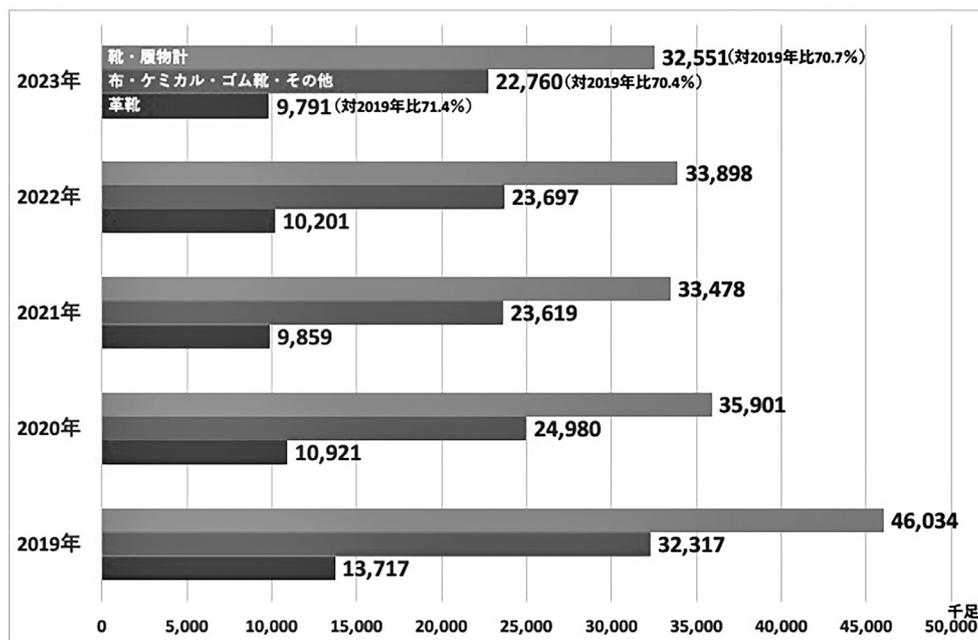
このように輸入状況は、内容に変化があるものの全体で見るとコロナ禍前に戻ってきていると言ってよさそうだが、国内生産は、どうなっているのか。

国内生産は、全日本履物団体協議会が「日本の履物統計」として公表している。2024年は、5月中旬時点で公表されていない。2023年までをまとめたのが【グラフ：国内靴・履物生産の推移】だ。

2019年は合計4603万4000足だったが、コロナ禍によって3590万1000足に下落。その後も回復は見られず3300万足台で推移し、2023年は、3255万1000足となっている。

革靴も同じような状況であり、2019年の

【グラフ：国内靴・履物生産の推移】



※全日本履物団体協議会「日本の履物統計」より

1371万7000足 から2020年は1092万1000足に。2021年はさらに落とし985万9000足と1000万足を切ったが、翌年1000万足台に戻したものの、2023年は再び979万1000足となった。再び1000万足台を取り戻せるかという、最近、伝え聞く浅草の状況を考え合わせると、厳しいように思える。

しかし、イタリアの国内生産も前記したような状況。そして世界の靴生産も、減少の方向にある。

「World Footwear Yearbook 2024」(APICCAPS刊)によると、世界の靴生産は、次のように推移している。

- 2014年 231億足
- 2019年 243億足
- 2020年 205億足
- 2022年 239億足
- 2023年 224億足

この生産を支えるのは、中国、インド。ベトナムがトップ3だが、2023年の生産高とシェアは、以下の通りだ。

- 中国 123億足 54.9%
- インド 26億足 11.6%
- ベトナム 14億足 6.3%

中国がシェア60%台を割ったのは、2015年の59.1%だが、それ以降、徐々に落としてはいるものの、2019年以降は、50%台半ばを維持している。これを追いかけるのが、インドとベトナムだが、近年の推移を見ると、中国を凌駕する存在には到底なり得そうもない。

イタリアでは、トランプ関税の影響によって回復は2026年以降になるという見方が強い。上記を鑑みると、世界の靴、そして日本も、しばらくは減少の方向で進みそうだ。

■2025年秋冬トレンド■

ミカムが来場者に提供している「BUYER GUIDE」をベースに2025年秋冬トレンドをまとめてみたい。

「BUYER GUIDE」は、「Livetrend」とい

うファッショントレンドを分析するプラットフォームとのパートナーシップで作成。マーケット動向、インスタグラム、インターネットの検索データ、それにさまざまなブランドのファッションショーから得たデータに加え、独自のアルゴリズムで解析し、消費者の興味を引きつけるトレンドテーマやアイテムを導き出している。

導き出したテーマは、4つ。そのテーマに叶うアイテムを市場性によって3つのレベルに分類し、具体的なスタイルを提示している。

各スタイルは、次の3つのアイコンで分類し、市場性が示されている。

【炎】成長が期待できるが、規模が小さくリスクが高い。

【グラフ】着実に成長する中程度のトレンド。商業的可能性がある。

【ショッピングカート】商業的ポテンシャルが確認できる大きくて安定したトレンド。

掲載した図では、市場性のレベルごとに有望そうなスタイルを1つ選んだ。

## 【TREND 1】UTOPIAN UTILITY

### ユートピアンユーティリティ

直訳すると、ユートピアの実用性となるが、実用性をソフト、あるいはエレガントに表現することを意味している。数年前から「ゴープコア」というトレンドが言われ始めており、これは「Good Old Raisins and Peanuts」の頭文字「GORP=ゴープ」に由来している。「ゴープ」とは、トレッキングなどに携帯する干しぶどうやピーナッツなどの栄養補給食のこと。つまり有益なものが核となることを意味し、10年ほど前に言われたノームコアや最近のクワイエットラグジュアリーにも通じていると言える。

核になるのは、トレッキングに着用する

アウトドアウェアやシューズ。その実用性を活かしつつも、素材を柔らかいスエードやナッパ、あるいは光沢のあるナイロンなどに。色はパステル的な柔らかいものが求められている。

## 【TREND 2】TWISTED CLASSICS

### ねじれたクラシック

昨シーズンも、1980年代に注目されたトラッドであるプレッピーが注目されたが、その流れを引き継ぐトレンド。プレッピーを筆頭とするトラッドスタイルにひねりを加えて新鮮味を出すことが求められている。

新鮮味とは、例えばローファーを、茶系を中心としたクラシックカラーを基調としながらもミントグリーンなどのアクセントカラーを加えてひねる。素材は、革らしい革にエンボス加工、またヒョウ柄やツイードなどを用いる。ローファーのトウをポインテッドしたり、大きなバックル使いでデザインバランスを変えることも重要だ。

## 【TREND 3】MEDITATIVE ARTISANS

### 瞑想するアルチザン

意味するところは、ボヘミアンへの注目。ボヘミアンは放浪の民を意味するが、彼らの装い、例えば装飾的な刺しゅうやフリンジ使いなど、民族的なものをイメージさせるディテールがポイントとなる。

素材や色は、自然を想起させることがポイントであり、色は、ブラウン、及びグリーン系。素材は、スエードや毛羽立たせた革、また毛皮も注目素材としてピックアップされる。例えば、エンジニア的なブーツをソフト素材、バレリーナをモコモコした毛足の長い素材で仕立てる、さらにワラビーのようなハイカットにムートンを使うといったことが考えられそうだ。

〈BUYER GUIDE〉が提案する2025年秋冬ファッショントレンド



【TREND 4】 WONDROUS DAZE

素晴らしき眩惑

ロマンチックパンク (romantic punk)、インディスリーズ (indie sleaze)、またフェアリーコア (fairly core) が内包されたトレンド。つまり1980年代のパンク、90年代のグランジと音楽と結び付いたファッション、それに90年代の日本のストリートで流行したゴスロリ的なムードも重視される。つまり、Z世代に注目されたトレンドの再注目と言える。

具体的には、反抗的なストリート感と装飾性の融合がポイントになりそうだ。例えば、バレリーナはストラップを編み上げるスタイルに、あるいはスタッズやジュエリー使いで装飾的に。ブーツは、筒幅を広くしヒダやドレープで装飾性を加えるといったことが挙げられそうだ。

次回のミカムは、9月7～9日に開催の予定だが、ミカムはこの開催で100回目を迎える。